

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 3 日現在

機関番号：21201
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：24530832
研究課題名(和文) 子どもを持たない夫婦における親密性と世代継承性 (generativity)

研究課題名(英文) Generativity and Intimacy in relation to Parental Status

研究代表者

福島 朋子 (Fukushima, Tomoko)

岩手県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：10285687

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、子どもがいない場合であっても、世代継承的な意識や行動は生じうると考え、親密性との関連を含めながら、検討したものである。調査は、ハンセン病回復者と一般の既婚成人を対象とし、前者には面接調査、後者には質問紙調査が実施された。調査の結果、1) 子どもを持っていない場合であっても世代継承的な意識や行動は生じうるが、その内容は子どもの有無で違いがありうる。2) 親密性との関連では、未婚でも世代継承的な意識や行動が生じる場合があり、婚姻状況だけで親密性を捉えられない可能性がある。また、既婚成人の場合は、性別と親密性の程度によって、世代継承的な意識や行動の内容が変わりうる、の2点が示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to confirm the hypothesis that mid-life adults will have a generative concern and exhibit a generative behavior regardless of parental status. Two surveys were conducted: an interviewing with Hansen's Disease sufferers who have not been allowed to have a child and a web-based questionnaire targeting mid-life adults. The results are as follows: 1) While non-parents as well as parents have a generative concern and exhibit a generative behavior, their contents differ depending on the presence of a child. 2) In relation to intimacy, unmarried adults as well as married adults have a generative concern and exhibit a generative behavior, suggesting that intimacy might not reflect only marital status. Married adults' generative concern and generative behavior differ in content according to the gender and the degree of marital intimacy.

研究分野：生涯発達心理学

キーワード：教育系心理学 生涯発達心理学 子どものない夫婦 generativity intimacy エリクソン

1. 研究開始当初の背景

これまで私たちは、ハンセン病回復者の生涯発達に関する研究を行ってきた。回復者は国の強制隔離政策により、療養所での生活を余儀なくされ、子どもを持つことを許されなかった人々である。隔離政策の廃止が検討されはじめた1990年以降、高齢期に達した回復者のなかから、自伝や詩文などの出版を行ったり、講演や語り部を中心とした啓発活動を開始する人々が次々と出現した。私たちは彼らのこういった活動を、エリクソンがいう世代継承性(generativity)が顕在化したものではないかと考えている。世代継承性といえば、一般に実子の養育が中心的な活動とされるが、上の例は子どものいない人々の場合であり、実子の養育でなくても、世代継承的な意識や活動が存在しうる可能性を示唆するものと思われる。

また、これまでの調査で、世代継承に関心が高い夫婦は概して親密性が高いのではないかという感触を得ている。親密性(intimacy)は、エリクソンが世代継承性(generativity)の前段階での発達課題として位置づけているものである。私たちが「子どものいない夫婦」における世代継承性と親密性の問題に関心を持ったのは以上のような経緯からである。

この「子どものいない夫婦」の問題は、ハンセン病回復者だけの問題ではない。現在生殖年齢の夫婦の約1割である140万組には子どもがいない。厚生労働省が医療機関を対象に行った調査によると、現在実際に不妊治療を受けている夫婦は推計30万組であり、このうち、不妊治療の恩恵に預かるのは約半数といわれる。すなわち、近い将来100万組を越える「子どものいない夫婦」が、実子の養育以外の活動を通して人生を考える、という課題に直面することになるのである。

わが国では1990年代以降、親になることによる成人の人格的発達に対する関心が高まり、多くの研究を生み出したが、その反面、親にならなかった成人の発達を取り上げた研究はほとんどないのが現状である。その意味で、「子どものいない夫婦」を研究対象とする社会的、学術的意義は極めて大きいと判断された。また、近年アメリカを中心に世代継承性(generativity)に関する研究が盛んになってきたが、そのほとんどが「子どものいる」人々を対象としたものである。その点で、本研究のような「子どものいない」人々を対象とする研究は独創性が極めて高いと考えられた。

2. 研究の目的

1を踏まえ、研究の目的を次のように設定した。

(1)ハンセン病回復者を対象に面接調査を実施し、世代継承性に関わる認識、世代継承的活動の有無、有りの場合はその内容や背景、そして夫婦の親密性について把握する。これ

までの調査記録も同じ視座から分析する。

(2)40歳～50歳代の「子どものいない」既婚者を対象に、世代継承性と親密性に関する質問紙調査を実施し、(1)と同様の分析を行う。

(3)(1)と(2)を総合し、「子どものいない」夫婦における世代継承性に関わる意識、世代継承的行動の関連性を検討する。また、それらと夫婦の親密性との関連も検討する。

3. 研究の方法

2. 研究の目的に即して述べる。

(1)ハンセン病回復者に対する面接調査

ハンセン病回復者14名(逝去者含む。生存者は2014年現在70～80歳代、台湾のハンセン病療養所楽生療養院の入所者2名を含む)に対して面接調査を実施した。この結果と、これまでの調査等の結果を合わせ、世代継承性と親密性の観点から分析を行った。

(2)40歳～50歳代の「子どものいない」既婚者を対象とした質問紙調査を実施した。子どもを持たない既婚者に対する対面もしくは郵送による質問紙調査は困難であると考えられたため、インターネット調査を実施した。NTTコム・オンライン・マーケティング・ソリューション株式会社にモニター登録している該当者に同社を通して調査依頼した。その結果、子どもを持たない既婚者279名(男性139名・女性140名)から協力が得られた。調査期間は2014年10月18日～20日であった。

4. 研究成果

(1)ハンセン病回復者における世代継承性と親密性について

ここでは調査によって得られた全体的な結果について述べる。なお、これらの結果は、ハンセン病回復者全体に必ずしもあてはまるものではない点に留意してほしい。

1)子どものいない背景

かつてはハンセン病の罹患が発覚すると、患者は強制的に療養所へ隔離された。隔離前に結婚し、子どもがいた入所者も存在していたが、特に子ども期に入所した人では、療養所内で結婚しても子どもを持つことは許されなかった。1960年代に入り、社会復帰者が増加してくると、退所後に子どもを持った回復者も出てきたが、それほど多くはない。年代的に言えば、2014年現在80歳を超える回復者で子どもがいる人は、入所以前からいた人を除いてほとんどおらず、社会復帰後に子どもを得た人は80歳より下の世代である。

2)世代継承的な活動や認識について

今回調査の対象となった回復者において、確認された世代継承的活動や意識は次の通りである。世代継承的活動が急激に行われるようになったのは、1990年代にハンセン病をめぐる社会的状況が変化して以降である。この時点で、彼らは既に高齢期に達していた点に注意してほしい。

語り部活動

1990年代に入り、旧厚生省国立療養所課長も務めた大谷藤郎氏を中心となって、ハンセン病資料館が設立され、回復者による語り部活動が始まった。そして、これを機に強制隔離を定めたらい予防法廃止運動が盛り上がりを見せ、各療養所等においても語り部活動が行われるようになった。同時に、療養所内で盛んであった、詩や和歌・俳句など文芸活動の成果や自伝などを出版する人々も続々と現われた。

2002年の国賠訴訟では、入所者だけではなく、社会復帰者も原告に加わり、その結果退所者の会が各地で結成され、語り部活動を始めたり、自伝を執筆して投稿する人も出てきた。

こうした語り部活動は児童・生徒を中心に、福祉や看護、医療の道を志す大学生に対しても行われた。全国的にみると、2010年くらいまでは入所者がその中心であったが、2015年現在で90歳近くとなっており、後継者養成が課題となっている。そのため現役を退いた社会復帰者がかかわり始めている。

今回の調査協力者のなかにも語り部活動や出版を行っている人がいるが、「ハンセン病のことを次の世代に語り継いでほしい」「人権問題に関して啓発したい」「自らの生きざまを話すことで若い世代の自殺やいじめ問題を食い止めたい」などと語っており、世代継承的な意識がその背景にあることが示唆される。

2014年には、長年の運動が実り、国立療養所栗生楽泉園に重監房資料館が開設され、また長島愛生園、邑久光明園、大島青松園の瀬戸内三園を世界文化遺産にしようという運動が市民協働的に始まっている。これらの動きも世代継承的な意識が根本にあるためであると推測される。

社会福祉的活動

1980年代になり、福祉に対する社会的関心が高まってくると、特に療養所の自治会活動にかかわっていた回復者のなかに、社会福祉的活動を行うものが出てきた。療養所内に盲人会があるなど、入所者の多くが障がいを持っていることもあって、自治会と外部の障がい者団体との交流があったことがその背景にあると考えられる。

今回の調査協力者のなかにも障がい児団体でのボランティア活動を行っている社会復帰者がいる。「必要とされるところで、自分を役立てたい」「子どもとのかかわりは面白い」と述べており、世代継承的な意識が示唆される。

子どもや若者への支援活動

国立療養所栗生楽泉園の療養祭では毎年のように地元小学生による御神輿が披露されている。それをみる入所者の目は優しく、ご祝儀がふるまわれることさえある。多磨全生園機関誌『多磨』を見ても、毎月のように、周辺の保育園や小学校の来園が行われてお

り、2012年には園内に保育所が開設された。このように子どもの存在を喜び、健やかな成長を祈念するという、わが国の高齢者一般の傾向が、療養所でもみられる。

このような傾向は世代継承性意識の根底にあるものであろうが、回復者の場合は特別な事情がそれに加わる。療養所の歴史をひも解くと、当初は患者も職員も家族であるとする疑似家族的な運営策がとられていた。その一環として、戦後まもなくまでに療養所内で結婚した夫婦のなかには、その後入所してきた児童の仮親になった人々が存在する。これは、子どもを持つことが許されなかった夫婦は疑似的な子育てを経験することができ、親とは会えない児童には見守り親が与えられるという働きをもつものであったと考えられる。

現在の入所者では仮親経験を持たない人が大半であろうが、「仮親」的な行動は今回の調査協力者でもみられた。例えば、今回の調査協力者のなかにも外の子どもの貧困問題にかかわるNPOへ継続的に寄付している人がいる。また、2011年の東日本大震災においては避難者を自宅に受け入れたりした人がおり、また被災した子どもたちを療養所に招待する活動も行われている。

このほか、療養所を訪問する大学生や若者を積極的に自宅へ招き、こうした若い世代を「仮孫」と呼んで、つき合いを続けている人もいる。

このように、子どもを温かく見守るという点では、入所者と他の高齢者と同じ傾向ではあるが、血縁のない子どもや若者の面倒を実際にみようとするのは、療養所にあった疑似家族の影響もあることが推測される。

3) 夫婦の親密性について

今回の調査協力者のうち、男性の入所者は自治会の運営と待遇改善のための運動にかかわってきた人々である。しかし、その妻がそうした活動に直接かかわることは少なく、妻が夫を支えるという形であった。その家庭での生活は、夫婦で共に花や盆栽を育て、イヌ・ネコを飼い、そして野菜を栽培するというもので、療養所で奨励されていた文芸活動にも取り組んでいた。しかし、中・高齢期になった1980年代になると、身体的な衰えから、動植物の飼育や栽培は規模が縮小し、90年代では止めざるを得なくなった。反面、この頃からハンセン病に対する社会的関心が増し、夫は文化・芸術活動を社会に問い始め、また、90年代半ばの予防法廃止運動や2001年の国賠訴訟などの活動を行い、また元患者としての自らの経験を伝えていこうとする、語り部活動にも取り組むようになった。この間も妻は夫を支え続けていた。

2000年代に入り、夫婦の一方が他界すると、喪失への適応が大きな課題となっており、これは夫婦の親密性の現われでもあるが、入所者の夫を失ったある妻は、療養所内の高齢化

もあって、入所者同士の日常的なつき合いも減少し、孤立気味となっている。反面、妻を失ったある夫は、それまでの社会活動で築いた人脈に支えられて、喪失を乗り越えようとしている。

一方、今回の調査に協力してくれた、既婚の社会復帰者は社会復帰者同士の婚姻である。結婚以来、夫婦同士で生活を支えあってきただけでなく、互いの親族の面倒もみようとされている。夫は国賠訴訟をきっかけとして退所者の会にかかわるようになり、啓発活動も始めた。妻は基本的に裏方としてそれを支えている。2010年代になって高齢期に達すると、どちらか一方が他界することを想定し、その準備を進めているようである。上で述べた社会活動で夫は人脈を築いているが、それもその準備の一端を担っているように思われる。

以上のように、今回の調査では、既婚の協力者の親密性は高いことが推測された。

4) 親密性と世代継承性の関連について

今回の調査協力者においては、世代継承的な意識や活動が、既婚・未婚の別を問わず確認された。これは親密性と世代継承性の関連があまりない可能性を示唆するものであるが、親密性を婚姻関係だけで捉えることに無理があるとも考えられる。

(2) 40歳～50歳代の「子どものいない」既婚者における世代継承性について

1) 調査項目

世代継承的意識：丸島・有光(2007)が、McAdams & de St.Aubin (1992)による世代性の関心尺度(Loyola Generativity Scale)に基づいて作成した改訂版日本語版世代性関心尺度(Generative Concern Scale-R:以下GCS-R)。全部で20項目あり、創造性、世話、世代継承性の3因子を構成する。それぞれについて、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の4件法で尋ねた。

世代継承的行動：筆者らが試作した8項目。次世代育成のための活動として、学校の同窓会活動、困っている子ども支援、の2項目、自らの足跡を残そうとする活動として、文芸活動、芸術活動、自伝執筆、の3項目、自らのルーツを調べる活動として、自分のルーツを辿る、先祖を祭る、国や地域の歴史を調べる、の3項目、計8項目。それぞれ、日常的な活動として「全くしていない」～「よくしている」の4件法で尋ねた。

夫婦の親密性：夫婦の親密性を把握するため、夫婦の共行動を取り上げた。伊藤・相良(2012)で用いられた「食事」「買い物」「旅行」「趣味・活動」の4項目に「映画を見に行く」の1項目を新たに追加した計5項目。それぞれについて「全く行かない」～「よく行く」の4件法で尋ねた。

2) 調査方法

比較対照のため、既述の子どもを持たない

既婚成人のほかに、子どもを持っている既婚成人279名(男性139名・女性140名)も含めて、既述の通り、インターネット調査を実施した。調査期日は2014年10月18日～20日である。

3) 結果

世代継承的意識について

表1にGCS-Rの得点を、性別、子どもの有無別に示した。これによると、創造性因子では、性の主効果が認められ、女性よりも男性のほうが有意に得点が高かった。世話因子では、子どもの有無の主効果が認められ、子ども有のほうが無よりも有意に得点が高かった。世代継承性については性と子どもの有無双方の主効果が認められ、女性よりは男性、子ども無よりは有のほうが有意に得点が高かった。この結果より、創造性については子どもの有無による違いはないが、世話(人の面倒をみたい)や世代継承性(後世に何かを残したい)については子どもを持っている人のほうが持っていない人よりも意識が高いことが示唆された。

表1 世代継承的意識(GCS-R)と性別、子どもの有無(上段:平均値、下段:SD)

	男性		女性		F値		
	有	無	有	無	性	子ども	交互作用
創造性	18.62 (4.07)	19.39 (4.43)	17.77 (4.63)	18.10 (4.25)	8.42**	2.23	.36
世話	17.08 (2.85)	15.89 (3.48)	17.54 (3.69)	16.31 (3.17)	2.41	18.50***	.01
継承性	11.13 (2.27)	10.30 (2.73)	10.25 (2.38)	8.99 (2.61)	26.50***	24.36***	.99

*: p<.05, **: p<.01, ***: p<.001

世代継承的行動について

表2に世代継承的行動の得点を、性別、子どもの有無別に示した。これによると、子どもの有無の主効果が認められたのは、学校の同窓会活動、困っている子ども支援、の2項目、性の主効果が認められたのは、自分のルーツを調べる、国や地域の歴史を調べる、の2項目である。双方の主効果が認められたのは、先祖を祭る、の1項目である。残りの3項目についてはいずれの主効果も認められなかった。この結果より、子どもを支援する活動は子どもを持っている人のほうが持っていない人よりも行っていること、自らのルーツを調べる活動は子どもの有無による違いはない一方で女性よりも男性のほうがよ

表2 世代継承的行動と性別、子どもの有無(上段:平均値、下段:SD)

	男性		女性		F値		
	有	無	有	無	性	子ども	交互作用
学校・同窓会	1.65 (.79)	1.35 (.69)	1.57 (.75)	1.20 (.48)	3.62	33.48***	.35
困っている子ども支援	1.50 (.64)	1.29 (.60)	1.42 (.71)	1.30 (.73)	.30	8.39**	.59
文芸活動	1.30 (.61)	1.28 (.59)	1.32 (.70)	1.29 (.65)	.09	.22	.04
芸術活動	1.58 (.81)	1.63 (.97)	1.59 (.91)	1.63 (.96)	.02	.31	.01
自伝を書く	1.14 (.50)	1.10 (.39)	1.08 (.27)	1.09 (.39)	1.44	.29	.56
ルーツを調べる	1.30 (.62)	1.22 (.54)	1.19 (.45)	1.14 (.43)	4.40*	1.97	.06
先祖を祭る	2.42 (1.06)	2.17 (1.07)	2.56 (1.00)	2.39 (1.06)	4.30*	5.90*	.17
国や地域の歴史を調べる	1.72 (.83)	1.74 (.90)	1.57 (.77)	1.57 (.81)	5.16*	.02	.02

*: p<.05, **: p<.01, ***: p<.001

り行っていること、先祖を祭る行動は、子どもを持っている人のほうが持っていない人よりも、男性のほうが女性よりも行っていること、そして、自らの足跡を残そうとする活動については子どもの有無や性別による差はないことが示唆された。

夫婦の親密性（共行動）と世代継承的意識との関係

表3は、GCS-Rの3因子ごとの得点と夫婦の共行動得点との相関である。これによると、男性においては、子どもの有無にかかわらず、創造性と世話が夫婦の共行動得点と有意な正の相関がみられた。一方、女性においては、子ども有の場合は世代継承性が、無の場合は世話が、夫婦の共行動得点と有意な正の相関がみられた。この結果より、男性の場合は子どもの有無にかかわらず、夫婦の共行動が多ければ多いほど創造的なことや他者の世話

表3 夫婦の親密性（共行動）と世代継承的意識(GCS-R)の相関

	男性		女性	
	有	無	有	無
創造性	.198*	.186*	.109	.123
世話	.342***	.293***	.133	.196*
継承性	.119	.104	.226**	-.032

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

をすることに高い関心をもつことが、女性の場合は、夫婦の共行動が多ければ多いほど、子どもを持っている人では次世代に何かを継承しようとするに、持っていない人では他者の世話をすることに高い関心を持つことが示唆された。ただし、ここでみられた有意な相関関係については、相関係数の大きさからみていずれも弱い相関であった点を付記しておく。

夫婦の親密性（共行動）と世代継承的行動との関係

表4は、世代継承的行動の得点と夫婦の共行動得点との相関である。これによると、子どもを持っている男性では学校の同窓会活動において、同女性では学校の同窓会活動、困っている子ども支援、文芸活動、先祖を祭る行動、国や地域の歴史を調べる、の各項目で有意な相関がみられた。一方、子どもを持っていない男性では困っている子ども支援、芸術活動、自伝を書く、の各項目で有意な相関がみられたが、子どもを持っていない女性では有意な相関のみみられた項目はなかった。

の世代継承的意識との関連でいえば、世代継承的行動の項目のうち、学校の同窓会活動や困っている子ども支援は「世話」に、文芸活動や芸術活動は「創造性」に、自伝を書く、自分のルーツを調べる、先祖を祭る行動、国や地域の歴史を調べるは「世代継承性」に対応する。この対応関係でみると、意識レベルでは有意な相関があったもののなかで、行動レベルでも有意な相関が1つでもみられたのは、子どもを持っている男性で「世話」、子どもを持っていない男性で「世話」「創造性」、子どもを持っている女性で「世代継承

表4 夫婦の親密性（共行動）と世代継承的行動との相関

	男性		女性	
	有	無	有	無
学校・同窓会	.034	.083	.185*	-.029
困っている子ども支援	.236**	.195*	.229**	.098
文芸活動	-.056	.145	.208*	.000
芸術活動	-.142	.211*	.081	.160
自伝を書く	-.065	.183*	.087	-.049
自分のルーツを調べる	.024	.108	.165	.021
先祖を祭る	.159	-.013	.188*	.078
国や地域の歴史を調べる	.092	.114	.251**	.093

*: $p < .05$, **: $p < .01$, ***: $p < .001$

性」であった。これらにおいては、夫婦の共行動が多くなればなるほど、意識面でも行動面でも高まっていくことが示唆される。他方、意識レベルでは有意な相関がみられたものの、行動レベルではみられなかったのは、子どもを持っている男性の「創造性」と子どもを持っていない女性の「世話」であった。反対に、意識レベルでは有意な相関がみられなかったものの、行動レベルではみられたのは、子どもを持っていない男性の「世代継承性」、子どもを持っている女性の「世話」と「創造性」であった。ここで注目されるのは、子どもを持っている女性の意識と行動による結果のずれである。意識レベルでは夫婦の共行動と有意な相関があったのが「世代継承性」だけだったものが、行動レベルでは「世話」「創造性」が加わっている。夫婦の親密性が高くないと実際に行動するのは難しいということなのかもしれない。これ以外のずれについてはいずれも容易に解釈できる傾向にはなっていない。今後の課題である。なお、ここでみられた有意な相関関係は、相関係数の大きさからみていずれも弱い相関であった点を付記しておく。

(3)まとめと今後の課題

成人期発達において、親になることの意義を探求する研究は数多い。その反面、親にならなかった成人の発達を把握しようとする研究はほとんどみられない。本研究は、子どもがいない場合であっても、世代継承（generativity）的な意識や行動は生じうると考え、子どもを持たない中・高齢期の人々を対象に、親密性（intimacy）との関連を含めながら、検討した。調査は、ハンセン病回復者と一般の既婚成人を対象とし、前者には面接調査、後者には質問紙調査が実施された。

その結果、ハンセン病回復者では世代継承的な意識や行動が、既婚・未婚の別を問わず確認された。また、彼らの世代継承的行動が1990年代にハンセン病をめぐる社会的状況の変化がきっかけになって生じていることが示された。

一般の既婚成人に対する調査では、まず世代継承性の意識という点で、子どもを持たない人は、創造性（何か新しいことをしたい）で持っている人と差はないものの、世話（人の面倒をみたい）や世代継承性（後世に何かを残したい）では、子どもを持っている人よりも意識が弱いことがわかった。また、世代継承性の行動の点でも、自らの足跡を残そう

とする活動で持っている人と差がない一方で、子どもを支援する活動や先祖を祭る行動で持っている人より行う程度が低いことがわかった。

また、夫婦の親密性の指標として、夫婦の共行動を取り上げ、それと世代継承的意識との関連を調べたところ、男性の場合は子どもの有無にかかわらず、夫婦の共行動が多ければ多いほど創造的なことや他者の世話をすることに高い関心をもつことが、女性の場合は、夫婦の共行動が多ければ多いほど、子どもを持っている人では次世代に何かを継承しようとするに、持っていない人では他者の世話をすることに高い関心を持つことが示唆された。しかし、その一方で世代継承的行動との関連をみると、上の結果とは異なった傾向が出ている部分があり（特に子どもを持っている女性）、行動レベルと意識レベルで結果に違いがあることがうかがわれた。

世代継承性と親密性の関係については、エリクソンが心理社会的発達理論で明らかにしているが、本研究の結果を踏まえると、次の3点が指摘できる。

子どもを持っていない場合であっても世代継承的意識や行動は生じうるが、その内容は子どもの有無で違いがありうる。

親密性との関連では、未婚でも世代継承的意識や行動が生じる場合があり、婚姻状況だけで親密性を捉えられない可能性がある。また、既婚成人の場合は、性別と親密性の程度によって、世代継承的意識や行動の内容が変わりうる。

世代継承的行動は社会的状況によって、その発現の仕方が変わりうる。

今後においては、まず未婚で子どもを持たない成人の場合でも世代継承的意識や行動がみられるかどうかを確認し、また今回の報告では、夫婦の共行動を親密性の指標としたが、他の尺度を指標とした場合でも同じような結果になるかを確認することで、世代継承性と親密性の関連をより一層明確にしていくことが課題である。

<引用文献>

丸島令子・有光興記 (2007) 世代性関心と世代性行動尺度の改訂版作成と信頼性、妥当性の検討, 心理学研究, 第 78 巻第 3 号, pp. 303-309.

McAdams, D. P., & de St. Aubin, E. (1992) A theory of generativity and its assessment through self-report, behavioral acts and narrative themes in autobiography. *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.62, pp.1003-1015.

伊藤裕子・相良順子 (2012). 定年後の夫婦関係と心理的健康との関連 現役世代との比較から 家族心理学研究, 第 26 巻, pp.1-12.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

沼山博・福島朋子・菊池武烈 ハンセン病療養施設入所者における在郷家族との関係性の推移に関する研究, 山形県立米沢女子短期大学生活文化研究所報告第 41 巻 pp.13-19, 2014 年

福島朋子・沼山博 子どもの有無と主観的幸福感 中年期における規定因を中心として, 心理学研究, 印刷中

〔学会発表〕(計 2 件)

Hiroshi Numayama, Tomoko Fukushima, Takekatsu Kikuchi, "Transition in Social Activities of Hansen Disease Sanatorium Residents in Japan: From the Perspective of "Generativity"" The 11th Annual Hawaii International Conference on Social Sciences. 2012 年 6 月 2 日 ホノルル市 (アメリカ)

Hiroshi Numayama, Tomoko Fukushima, "A study of life-course in the elder Taiwanese generation with Japanese-style education", 28th International Congress of Applied Psychology. 2014 年 7 月 13 日 パリ市 (フランス)

〔図書〕(計 1 件)

福島朋子 『親にとって子どもとは』『女性のライフコースとワークライフバランス』, 沼山博・三浦主博編「新訂 子どもとかかわる人の心理学」萌文書林, pp.168-175, 2013 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

福島 朋子 (Fukushima Tomoko)
岩手県立大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号: 10285687

(2) 連携研究者

沼山 博 (Numayama Hiroshi)
山形県立米沢栄養大学・健康栄養学部・教授
研究者番号: 00285678

(3) 研究協力者

菊池 武烈 (Kikuchi Takekatsu)
宮城教育大学・監事
研究者番号: 90004085